

上旬大熊C班

9月3日～9月8日

河村侑哉 小寺あい 渡邊紗雪
HUNG Wei Ting 井田美晴 高橋亘



目次

- 3日の議論
- 4日のサンプリング→議論
- 6日の議論
- 7日の議論
- 8日の議論
- 8日目の議論の特徴
- 研修全体を通して

3日 議論

○誰に伝えたいか

- 親、兄弟などの身近な家族
- 大学の同級生や友人たち
- ゼミなど同じ分野の人

○理由

- まだ無知で伝えたいことが曖昧。（知識と事実で、現地そのものはよくわからない）
- ただの知識と結果で、近い人など上手く伝えられずともある程度、反応の予想ができる人しか想像がつかない。

4日 サンプルング (住宅地) → 議論

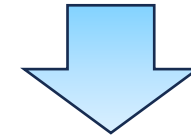
○誰に伝えたいか

- 福島にまだ抵抗感を持つ日本人
- 住みたい、帰りたいけど不安がある人
- 情報を伝える人 (メディア等)

○理由

- サンプルングで得た経験を活かしたい
→ データを得るための大量の作業、測定の苦勞
- 帰宅困難区域についての理解を広めたい
→ 私服でも入ることができる 防護服は必要ない
- 測定データの広め方 (省略したことで誤った表現になることもある)

身近な人



福島に
興味関心がある人



単位 : $\mu\text{Sv h}^{-1}$

6日 議論

○誰に伝えたいか

- ①過去の自分
- ②農業協同組合(JA)
- ③市長・区長

○理由

- ①もっと早く放射線に興味を持っていた。
- ②手つかずで荒れた土地を見て、農家の人は戻ってこようと思うか。
→農地に対する支援が必要なのでは？
- ③教育設備・考え方を取り入れてほしい。（大熊町立 学び舎 ゆめの森）
全国に広がってほしい。



7日 議論

○誰に伝えたいか

- 帰ってきた元の住民 → 政府や企業など
 - 世間の流れに流されるのではなく、住民が主体的に、自立的になりたいこと
- 移住した人 → 移住を考えている人
 - 何もないから、何もありえる、可能性が溢れること
- ここにいた人・戻らない/戻れない人 → 時間という切り口で災害の深刻性を受け取っていない人たち
 - 家族や仕事の事情で戻れないこと

○理由

- 復興は誰でも排除せず、インクルーシブであるため、現地の人との話し合いから学んだ一人一人の想いを伝えたい

8日 議論

○誰に何を伝えたいか

・**原発、放射線について他人事だと思っている人**

→原発によって電力という利益を得ていた

身近なものであるという認識、当事者意識を持つことにつながる

・**処理水、汚染土、原発など放射線が関わることについて批判的な人**

→ノーリスクなどないということ

正しく危険を認識してほしい。安心だと感じるかどうかは人それぞれ

・**日本政府**

→放射線に関する教育を充実させてほしい

(閾値、線量限度、放射線の種類など)

～2045という土壌処理の期限を設けてもいいのか？

- ・ **患者(主に高齢者、インフォームドコンセント時)**

→放射線への嫌悪感を刺激しないように説明する

- ・ **職場の人(放射線医療関係)**

→福島の実況を伝えて、医療人に興味を持ってもらいたい。

放射線に関する事なら興味をもってもらいやすい

- ・ **災害社会学を研究している先生**

→サンプリングの不確定要素の面白さ

- ・ **科学哲学を研究している先生**

→採集や処理の時の研究者の事情や判断について

- ・ **復興を勉強する未来の同級生(社会学)**

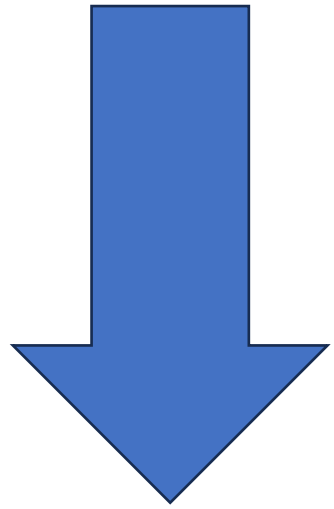
→線量、土壌、基準値について

8日目の議論の特徴

- 「伝えたい人」 → 「伝えたいこと」 の順から
「伝えたいこと」 → 「伝えたい人」 の順に考えることが多くなった
- 自分の専門にからめた意見、考え方が増えた
↑ 自分たちの中にもわずかながら当事者意識が生まれた！
- リスク管理の話が出てきた
- 「放射線」に関する話題が増えた

研修全体を通して

最初は自分から見た視点のみ



現地の人の話、1F・中貯見学、
サンプリング

被災者、事業者の両方の視点を知って
意見の幅を広げることができた。